欧洲経済史

大塚久雄著

岩波書店

欧洲経済史

大塚久雄著

岩波書店

欧洲経済史

一九七三年六月一一日　第一刷発行©
一九八〇年三月一〇日　第一〇刷発行

定価九〇〇円

著者　大塚久雄

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二―五―五
株式会社　岩波書店
電話 〇三―二六五―四一一一
振替 東京 六―二六二四〇

印刷・理想社　製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

改版序

このたび単行本『欧洲経済史』を、改版のうえ、岩波書店から公刊することになった。内容についていえば、誤植の訂正その他の最少限度必要な些細な変更以外、すべて初版のままである。また今回から、発行所が弘文堂から岩波書店にかわるが、その間弘文堂社長鯉淵年祐氏が示された御厚意に対し心から御礼申上げたいと思う。

いうまでもないことであるが、初版を公刊してからすでに十七、八年も経過しており、その間における研究史の進展に照らして、あちらこちら叙述を変更したり、文献を追加したりする必要が生じている。それにまた、何よりも、最後の第三章は依然としてその要旨を書き記したままになっている。これらの点を何とか訂正し補充したいという気持は、なお十分持ちつづけているのではあるが、このたびもそれを、残念ながら、実現しえなかった。読者諸氏の御寛恕を乞いたい。

なお、序ながら記しておくと、本文注のなかに見られる「著作集」は「大塚久雄著作集」の略記であるので、そのように御記憶願いたいと思う。

一九七三年春

大塚久雄

序

(一) 本書は欧州経済史の入門的な概説書として書かれた。しかし、普通の概説風の形式をとっていない。何よりもまず、叙述は問題的視点から構成され、かならずしも年代的な順序にしたがって配列されてはいない。このことは、はじめて経済史を学ぼうとされる方々に、多少とも不便な感じをあたえる結果になるのではないかと思われるので、できるならば何かの年表を座右におき、必要におうじて西洋史の概説書などを参照していただくことを願う。

(二) 本書は、目次に示されているとおり、本来三章からなり、第一章「資本主義の発達」および第二章「産業資本の形成」が前半、第三章「封建制から資本主義への移行」が後半を形づくるはずであったが、前半のみで予定の紙数を使いはたしたので、第三章は要旨のみをしるすに止めた。しかし、第一章および第二章だけでも、欧州経済史の概説としてなお十分に一つのまとまりをもっていると思われるので、この点ぜひ読者諸氏の御諒承をこいたい。そのほかにも、本書にはさまざまの未熟な点や不明瞭、不正確の点が残されていると思われるので、巨細の別なく、批判していただくことを読者の方々にお願いしたい。

(三) 本書の校正および索引の作成については、諸田実、船山栄一、田中豊治、長森久雄の諸氏の手をわずらわすことが多かった。しかし何といっても、この序文を書き記すにあたって思いおこされるのは弘文堂編集部、とくに早武忠良氏の両三年にわたる忍耐と援助と激励である。これなくしては、本書はとうてい上梓の日をもつに至らなかったのではないかとさえ思っている。また、同編集部の長谷川孝雄君にもいろいろとこまごましたことについて御厄介に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

改版序
序
第一章　資本主義の発達……一
一　資本主義……一
一　まえおき……一
二　資本主義……二
三　資本主義以前の生産諸様式……五
二　産業資本……一四
四　産業資本……一四
五　工場およびマニュファクチャー……一六
六　奴隷制および農奴制を基盤としておこなわれる産業経営……二四
三　原始蓄積……二七
七　原始蓄積……二七

八　原始蓄積の経済外的局面……二九
第二章　産業資本の形成……二九
一　貨幣経済の発達……二九
九　問題の所在……二九
一〇　貨幣経済の発達……四三
二　商人の活躍とその問屋制前貸……四七
一一　前期的資本……四七
一二　都市経済とギルド制度……六二
一三　中世都市を拠点とする遠隔地商業……七三
一四　問屋制度の展開……八一
三　農村工業と中産的生産者層の分解……九四
一五　農村工業の展開と局地的市場圏の形成……九四
一六　中産的生産者層の成立と分解・マニュファクチャーの発達……一〇七
一七　マニュファクチャーと問屋制度のさまざまな絡み合い・補充と対立……一一八
一八　自生的産業革命の展開……一三〇
四　産業資本形成の歴史的条件……一四三
一九　農村工業の展開と土地制度……一四三

第三章　封建制から資本主義への移行……一五〇
——その要旨——
索　引

第一章　資本主義の発達

一　資本主義

一　まえおき

欧州経済史について概説をおこなおうとするばあい、おそらくいくつかの方法がありうるはずである。けれども、本書では、まず「資本主義の発達」という近代史に独自な――なかんずくヨーロッパの近代史をすぐれて特徴づけている――歴史的事実をとりあげて、それに関する基礎的諸概念を系統だてて説明し、それを出発点としつつ、できるだけ多く経済史学上の諸問題にふれていくという方法をとりたいと思う。しかし、まず基礎的諸概念を系統だてて説明するということは、このばあいどうして必要となり、また、われわれの研究にとってどのような意味をもつのであろうか。叙述をはじめるに先だち、そうした点について、あらかじめ一言しておくことにしたい。

他の諸科学のばあいと同じように、経済史学においても、基礎的な諸概念を言い表わす用語の適切な選択と、その用語法の正確とは、きわめて重要な意義をもっている。もし基礎的な諸概念を言い表わす用語(＝術語)が不適当であったり、また概念規定が不明瞭であるために用語法が一義的でなく、人ごとにまた時によって異なった意味に用いられるとしたならば、およそ学術上の研究も批判も、したがってまた歴史叙述もまたおのずから混乱におちいる他はないからである。* こうしたことがらを考慮にいれて、本書では重要な術語がはじめて使用されるばあい、そのつどその

用語法を説明し、かつ許されるかぎり正確にその意味内容を私なりに限定していくつもりである。**

* イギリスの経済史学界では、用語法の適正と正確を期するということが――その観点がどこまでわれわれのものと共通であるかは一応別として――近来ますます問題となってきているようである。たとえば、E. M. Carus-Wilson (ed.), *Essays in Economic History* 所収の二論文 M. M. Postan, The Rise of a Money Economy や R. H. Tawney, The Rise of Gentry の Postscript を参照されたい。そのばあい、なかでも俎上にのせられるべき問題の用語としては、ポスタン教授によって《Rise of a Money Economy》が、トーニー教授によって《the Middle Classes》が指摘されている。

** ただし、念のためにいっておくが、ここで問題としているのは、われわれが史実を分析したり叙述したりするためにいわば道具として使用するところの第二次的な、合理化された学術用語（＝術語）について、その用語法を的確かつ一義的ならしめるべきだということ、いやそれのみであって、史料のなかに見出される原用語そのものについていっているのではない。後者の用語法はもちろん史料自体の語るところに即して、むしろ多様性において、とらえられねばならないのである。したがって、史料自体のなかに見出される原用語を同時に術語として用いるようになっているばあい――これはわれわれのしばしば遭遇するところである――には、きわめて周到な注意を要するわけである。なお、このようなことがらに関連して、経済史学と社会諸科学、とくに経済学との関係がただちに問題になってくるだろうと思うので、この点に関する本書の立場についても、ここで一言言及しておくこととしよう。およそ経済史の研究や叙述が経済学と全く無関係に成りたちうる（あるいは成りたつべきだ）というような見解をわれわれは本書でとっていない。そうした立場からは、以上のような問題は論理上殆んど生じてこないのである。さらにまた、経済学を、ただ経済史の研究と叙述のために「道路掃除人夫」というほどの意味でのみ利用するというのも、われわれの見解ではない。むしろ経済史学においては経済学と歴史学とが相互に十分に滲透し合わねばならぬのであり、したがって、経済史学は歴史学の一部門であると同時に、広義での経済学であるべきだ、とわれわれは考えている。

二　資本主義

さて、経済史学のうえで「資本主義の発達」などというばあい、「資本主義」Kapitalismus, capitalism, capitalisme

とは、いったいどのような事実を意味しているのであろうか。あるいは、意味せしめるべきなのであろうか。この点に関しては研究史上いろいろの立場があり、したがってもちろんいろいろな用語法がみられる。* しかし、ここでは、近代の西ヨーロッパの諸国やアメリカ合衆国などで世界史上もっとも純粋に近い姿をとって現われてきたような、近代に独自な生産様式という意味に用いることにしようと思う。そのばあい、生産様式という語はさしあたって歴史の一定の段階に照応した、経済生活(生産⇅消費)の根本的な社会的組み立てというほどに解しておきたい。**

* 本書における用語法と異なるものの一つとして、ここではとくに、「資本主義」を歴史上に見いだされる営利(＝利潤追求)の営み一般と解する立場をあげておこうと思う。そのばあいには、営みの内容がどんなものであるにしろ、ともかくおよそ金もうけのための営みがすべて「資本主義」と呼ばれることになるわけである。このような立場にたって「資本主義」の発達に論及している代表的な事例としては、おそらくルヨ・ブレンターノの諸著作をあげることができるだろう。たとえば、彼の論文集 Lujo Brentano, *Die Anfänge des modernen Kapitalismus*, 1918(ルヨ・ブレンタノ、田中善治郎訳『近世資本主義の起源』)——増補されて *Der wirtschaftende Mensch in der Geschichte*, 1923 となった——や Ders., *Das Wirtschaftsleben der antiken Welt*, 1929(L・ブレンタノ、舟越康寿訳『欧羅巴・古代経済史概説』)などを参照。「資本主義」のこのような用語法は、現在でも地下水のようにと形容してもよいほど広くかつ深く流布されているが、それのみでなく、時に彼とは理論的立場をかなり異にする人々によってさえ採用されているばあいもあるので、この点注意を要する。たとえば、マックス・ヴェーバーは、資本主義の発展に関してはブレンターノと理論的立場をまったく異にしているが、「資本主義」の用語法はむしろ彼とほぼ相等しいということができよう。Max Weber, *Wirtschaftsgeschichte*, 1923, Viertes Kapitel(マックス・ウェーバー、黒正巌・青山秀夫訳『一般社会経済史要論』下、第四章)および Ders., *Wirtschaft und Gesellschaft*, 4. Aufl., I, SS. 95 ff. などを参照。われわれは本書ではこうしたブレンターノ的用語法をとらないが、その理由はただ、近代に独自な生産様式の近代に独自なゆえんを正確に表出するのに適当でないから、ということのみである。

** このような意味での「資本主義」は、いうまでもなく、カール・マルクスの『資本論』における当面の研究対象であった。けれども、今日でこそ、マルクス主義経済学においても「資本主義」は術語として一般に使用されるようになっているが、『資

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本論』においては「資本主義」という用語はまだ使用されてはいない。ちなみに、「資本主義」が術語として今日のような普及をみるにいたるきっかけをつくったのは、おそらく「近代資本主義」の表題をもつヴェルナー・ゾムバルトの大著、Werner Sombart, *Der moderne Kapitalismus*, 1. Aufl., 2 Bde., 1898 ; 2. vermehrte Aufl., 3 Bde. (jeder 2 Halbbände), 1916 であったと思われる。ところで、世界史上の各「経済時代」Wirtschaftsepoche およびその一つから次のものへの推移を「経済精神」Wirtschaftsgeist→「経済形態」Wirtschaftsformen→「経済制度」Wirtschaftssystem という構造において捉えようとする彼の歴史理論は、今日ではそのまま踏襲されることは殆んどないが、しかし右の書物はいまなお示唆されるところはきわめて大きい。

さて、人類はその生活を営んでいくために絶えず必要な物資を生産せねばならず、したがって、そうした生産活動は歴史の曙から現在にいたるまで少しも休まず続けられてきたわけである。少なくともそう想定するほかはない。しかもその生産活動たるや、個々人がてんでんばらばらにではなく、一定の社会をなしておこなわれてきた上に、その社会の根本的な組み立て、すなわち生産様式はまた時代によっていちじるしく異なっているのである。そうした世界史の上に見いだされる種々な生産諸様式のうち、とくに近代に特有なものが他ならぬ「資本主義」なのであって、なかでも西ヨーロッパの諸国やアメリカ合衆国などでそれがもっとも純粋に近い発達をとげたということは、さきにも触れておいた。それでは、そうした近代に独自な生産様式としての「資本主義」は、いったい、どのような根本的特徴を示しているのだろうか。それは、だいたい次のように要約してさしつかえあるまい。㈠ 商品生産(あるいは、一定の留保のもとに、貨幣経済と言いかえてもよい)が全社会的な規模にまで一般化しており、したがって経済生活の一般的な土台を形づくっているということ、㈡ しかもそうした商品生産は、単純な独立の小生産者たちによるものではなく、資本家が賃銀労働者たちを雇傭して生産労働に従事させる(すなわち、労働者たちがその労働力を商品として資本家に売り、彼のために生産労働に従事する)という関係にもとづいて行なわれているということ、生産様式としての「資本主義」はこうした二つの根本的事実によって特徴づけられており、そのもとでは、社会を構成する個々人の生

活需要もこのような生産関係(すなわち、商品生産という基礎的関係とその土台のうえに築きあげられている資本家＝賃銀労働者という階級的関係)の基礎の上にたって絶えず充たされていくのである。もちろん、こうした基本的関係のほかに、なお土地所有関係もまた度外視しえない重要さをもっており、地主が資本家、賃銀労働者とならんで独立の一階級を構成するが、しかしそうした土地所有関係は、「資本主義」という組み立てのうちに完全に組みこまれているばあい、上述の基本的関係に対してむしろ派生的ないし従属的なものとなっているという事実を忘れてはならない。*

＊「資本主義」のもとにおける土地所有関係(＝地主制)のこうした特質の歴史的意味については、後段で立ち入った説明をおこなうこととして、ここではとくに次の点を指摘しておきたい。すなわち、ここで一般的に説明しているのは、たとえばイギリスにおけるように農業における資本主義の発達がいわば典型的であり、資本家—賃銀労働者—地主という「三分制」system of tripartite division がすでに完成されているばあいについてであって、たとえば農地改革前の日本にみるようないわゆる半＝封建的な「資本主義」について言っているのではない。後者のばあいには土地所有(＝地主制)の意義はまさに逆で、むしろ基礎的であったといわねばならない。この点は十分な注意を要する。

三　資本主義以前の生産諸様式

「資本主義」のこのような根本的特徴は、世界史上にみられる他の主要な生産諸様式と比較してみるとき一層よくわかる。ところで、経済史研究の現段階に即していえば、世界史のうえで——必ずしも、各民族の歴史において、とはいわない——継起的な発展段階としてアジア的、古代奴隷制的、封建制的、資本主義的、社会主義的などの生産諸様式が知られているが、そのうち「資本主義」の成立に先だつアジア的、古代奴隷制的および封建制的などの生産諸様式はいったいどのような根本的特徴を具えていたのだろうか。さしあたって、次のような点を指摘することもできよう。*(一)「資本主義」に先だつ生産諸様式においては、そのいずれにあっても、経済生活の一般的な土台をなすもの

が商品生産ではなくて、「共同体」Gemeinde（土地占取のための単位集団）である。諸個人は共同体の一員として土地を占取し、この土地によって生産活動を営み、生活需要をみたしていく。もちろん、こうした基本的関係を補充して多かれ少なかれ商品生産もまた行われるが、このばあいには商品生産の方が派生的・従属的な地位にたっている。㈡このような共同体の基礎のうえにそれぞれ特有な階級的関係が築き上げられているのであるが、基礎をなす共同体の形態（＝発展段階）の異なるに応じてそうした階級的関係（したがって生産関係の総体）もまた異なった姿に構成されている。** しかし、こうした指摘だけではなお理解が困難だと思われるので、以下アジア的な、古代奴隷制的なおよび封建制的な生産様式について、それぞれのばあいの代表的な事例をとって簡単な説明を試みておくことにしよう。

* Karl Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Vorrede u. Einleitung（マルクス『経済学批判』序文および序説）; Ders., *Formen, die der kapitalistischen Produktion vorhergehen*（マルクス、飯田貫一訳『資本制生産に先行する諸形態』岩波書店、マルクス、佐藤進訳「資本制生産に先行する諸形態」河出書房『大思想全集』「マルクス」所収）および、拙著『共同体の基礎理論』、「著作集」第七巻所収などを参照。拙著にみられる理論的想定は、研究史の現段階においてはもっとも確実性の高いものと考えられるが、詳細な点については不明の点がなおきわめて多く、実証的研究の側からする批判が望まれるのである。

** きわめて抽象的に定式化してみると、次のようになるであろう。㈠アジア的生産様式のばあいには、血縁制的な「部族」共同体の基盤のうえにマルクスのいわゆる「普遍的隷従制」Allgemeine Sklaverei が展開される。そして古代オリエントにみるように、大規模な治水灌漑とむすびついたときに、あの特徴的な巨大専制諸国家が出現するのである。㈡古代奴隷制的生産様式のばあいには、「都市」共同体（あるいは「半都市」的農業共同体）を拠点として、その市民たちの支配下に奴隷制が展開され、そのあいだからいわゆる奴隷制オイコスが形成される。それは古典古代の地中海周辺で典型的な発達をとげた。㈢封建制的生産様式のばあいには、「村落」共同体の基盤のうえに農奴制度が展開され、封建的土地所有 feudale Grundeigentum が築き上げられる。それは、派生的なギルド制的「都市」共同体の形成によって補充される。こうした封建制は中世の西ヨーロッパで典型的な発達をとげた。

(1)　まず、アジア的生産様式の特徴を示す事例として、古代オリエントの専制諸国家のうちエジプトのばあいをとってみることとしよう。* もっとも、ひとくちに古代エジプトといってもその歴史は紀元前数千年紀にさかのぼり、とくにその曙の時代については不明の点がおそろしく多い。しかし、ファラオ(国王、大いなる門の意)による全土統一が達成された古王国の全盛期(紀元前三千年紀の中葉)には特徴的な経済の組み立ての骨格がすでにできあがっていたようである。それは、一言にしていえば、ファラオを最高統制者とし王国の全領域にわたって遂行されるような、自然経済基調の(もちろん多かれ少なかれ商品生産ないし貨幣経済をも伴った)統制経済であった。そうしたものは、おそらく、統一前から地方小国家(ノモス)を単位としてもおこなわれていたのであろう。

* 古代オリエント、とくに古代エジプトの経済史については、さしあたって次の諸書を参照。Max Weber, Agrarverhältnisse im Altertum, *G. A. zur Soz.- u. Wirtschaftsgesch.*, SS. 45–93(ウェーバー、渡辺・弓削訳『古代社会経済史』七七—一七六頁); Ders., *Wirtschaftsgeschichte*, SS. 59–70(ウェーバー、黒正・青山訳『一般社会経済史要論』上、一三六—六〇頁); Ders., *Wirtschaft u. Gesellschaft*, 4. Aufl., S. 615 f.(この部分の翻訳は右のヴェーバーの邦訳書、一六一—六頁に収録); Lujo Brentano, *Das Wirtschaftsleben der antiken Welt*, 1–2. Kap.(ブレンタノ、舟越訳『欧羅巴・古代経済史概説』第一—二章); M. Rostovzeff, *A History of the Ancient World*, 1926, I など。

その生産的基礎に目をむけると、人口の大部分を占める農民たちは、そして手工業者たちも、それぞれ特定の村落にいわば原籍をもち(のちのプトレマイオス期の用語にしたがえば「イディア」である)、血縁と呪術の絆によって強くそこに結びつけられていた。つまり、彼らはそれぞれきわめて強固な血縁制的「共同体」を形づくり(広い意味で「部族」共同体といってもよいだろう)、その一員として一定の土地に断ちがたく繋がれていたわけである。こうした血縁制的「共同体」関係がいったん上から支配の手段として用いられるようになったとき、ただそのことによって、村落全体がおそろしく強い隷従の地位におとされるということは明らかであろう。ファラオは、そして豪族(ノマルコ

	パン	麦酒壺	不明品	不明品	大壺
王妃は	10	2	1	—	2
王子および王女はそれぞれ	10	1	—	5	—
6人の侍女はそれぞれ	20	2	—	5	—
1人の侍女は	20	1	—	5	—
2人の侍女はそれぞれ	20	1	—	5	—
ナヘントの裁判官は	20	1	—	5	—
2人の近衛兵士官はそれぞれ	20	2	—	5	—
3人の高級裁判官はそれぞれ	20	2	—	5	—
第4級裁判官は	10	1	—	5	—

ス)たちも、こうしたやり方で農民その他をしだいに隷農(コローヌス)ともいうべき隷従の地位におとしいれ、政治的支配の経済的基礎に転化させた。もちろんファラオは、そして豪族たちも、他面多かれ少なかれ家内奴隷をも擁していたが、その比率が小さかったばかりでなく、一般の隷農との差もしだいに不明瞭となり、全体がいわば「被護と隷従のヒエラルキア」(階層的体制)を形づくるようになっていった。ヴェーバーはこうした関係を、中世フランスの法諺をもじって《Nul homme sans maître》(「だれにも主人がある」)と巧みに表現しているが、これこそがマルクスのいわゆる「普遍的隷従制」なのである。この「普遍的隷従制」を支える行政機構が村長を末端とする広汎なアジア的官僚制にほかならなかった。あのナイルの治水やピラミッドの建設に用いられた厖大な労働力はこうした官僚機構によって徴発されたが、前述のファラオの独自な統制経済もこうした基礎と機構の上にうちたてられたものであった。全土は一定の共同体間の分業関係によって編制され、いたるところにファラオの倉庫が設けられた。農民や手工業者たちはその余剰生産物をこの倉庫に納めねばならず、これは力づくで強制された。こうして倉庫に収納された余剰生産物は、こんどは一定の計画のもとに、上は王族から下は軍務・僧職・官職にある者、その従者たちにいたるまで、現物で配給された。現存の一古文書には右のような記載があるという。* 配給された現物はまた互いに交換することができたし、さらにそれを土台として一種の現物振替取引さえ発生した。こうして全国は原理上一個の経済的単位をなし、いわば

王の一家であるかのような観を呈したのであった。その後貨幣経済の発達は、とくにプトレマイオス時代にいたって統治の機構に種々な変化をもたらしはしたが、そうした経済生活の根本的な組み立てを根本的に揺がすには至らなかった。

＊ ブレンタノ、前掲邦訳書、五―六頁。これは Eduard Meyer, *Kleine Schriften*, 1910, S. 163 f. から抜粋されたものである。

(2) つぎに、古代奴隷制的生産様式の特徴的な組み立てを理解するために、古代の地中海周辺地域に例をとることとしよう。* この地域はオリエント専制国家のいわば辺境地方として歴史の舞台に登場してくるが、ここでは、「農業共同体」は、エジプトのばあいのように隷従の絆として作用することなく、むしろ逆に、その成員たちに強力な独立の手段をあたえることとなった。というのも、そうした農業共同体の性格自体がすでに古いものといちじるしく異なっていたからである。すなわち、古い部族制に固有な血縁制的・呪術的な規制力は弛緩し、かつ常時戦闘態勢にある農民の軍事組織へと編制替えされて、いわば「半都市」(マックス・ヴェーバー)の相貌をおびはじめていたのである。とくに、歴史の上にその名をとどめているような代表的なばあいにあっては、かずかずのそうした共同体がたがいに結合し、いわゆるシュノイキスモス(集住)の方法によってしだいに大規模な「都市」共同体**(ポリス、キーウィタース)を形づくり、独立の「都市」国家となっていった。そうした「都市」共同体の内部では、とくにいわゆる民主化の進行に伴って、共同体の個々の成員たちは多かれ少なかれ自由な、土地所有者にして戦士たる「市民」に成長していったが、他ならぬこうした「市民」によって、あの古典古代に特有な「奴隷」使役が展開されたのであった。

＊ 古典古代のギリシア諸都市、とくにアテーナイおよびローマの経済史については、さしあたって次の諸書を参照。Max Weber, Agrarverhältnisse im Altertum, *G. A. zur Soz.- u. Wirtschaftsgesch.*, SS. 93-278(ウェーバー、渡辺・弓削訳『古代社会経済史』一七七―五〇二頁); Ders., Die soziale Gründe des Untergangs der antiken Kultur, *a. a. O.*(ウェーバー、堀米庸三訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com